佛教大学大学院紀要　文学研究科篇　第38号（2010年３月）

『伊曾保物語』と江戸時代におけるその受容について

濵　田　幸　子

〔抄　録〕

16世紀後半、キリスト教布教・伝道を目的に来日した宣教師によって伝えられ、日本語に翻訳された『イソップ寓話集』は、ローマ字口語体で書かれた『イソポのハブラス』と国字文語体で書かれた『伊曾保物語』の二種である。『イソポのハブラス』は、文禄２（1593）年天草学林で出版されたが、鎖国時代の発禁措置もあり、一般には流布せず、現在世界中に唯一冊、大英博物館の所蔵本があるのみである。一方『伊曾保物語』は、一般に広く普及し、芸の道の教えや子弟の教育のための教訓書として受容された。キリスト教の宣教師によって伝えられた書物であるにもかかわらず、鎖国後も『伊曾保物語』が出版され読み続けられたのは、物語の寓意が、その時代にふさわしい教訓として受け入れられたからであろう。『伊曾保物語』の本文と書物に引用された本文及び寓意に着目することで、日本の近世における『伊曾保物語』の受容のあり方を考察した。

キーワード　『伊曾保物語』、『イソポのハブラス』、寓話、寓意、教訓

はじめに

『イソップ寓話集』は16世紀後半、キリスト教布教・伝道を目的に来日した宣教師によって伝えられ、日本語に翻訳された。この時、日本語に翻訳され、現存している『イソップ寓話集』は二種ある。一つは、ローマ字口語体で書かれた『イソポのハブラス』で、もう一つは国字文語体で書かれた『伊曾保物語』である(1)。『イソポのハブラス』は、文禄２（1593）年天草学林で出版されたが、鎖国時代の発禁措置もあり、一般には流布せず、現在世界中に唯一冊、大英博物館の所蔵本があるのみで、その存在は、明治になって知られるようになった。一方『伊曾保物語』は、慶長・元和年間版から寛永16（1639）年刊本まで九種の古活字本が出、その後万治２（1659）年刊の挿絵入り製版本も出て一般に広く普及した。両書は、ともに前半に伝記、後半に寓話の二本立ての構成であるが、伝記部分は『伊曾保物語』三十話中二十三話までが『イソポのハブラス』と共通の内容で(2)、寓話部では『イソポのハブラス』七十話と『伊曾保物語』六十四話のうち共通話は二十五話だけである。両書の関係については、新村出

氏[3]、小堀桂一郎氏[4]、大塚光信氏[5]、遠藤潤一氏[6]によって現在のところ次のように考えられている。『伊曾保物語』は、ラテン語本文の原書から直訳された手書き稿本（祖本・国字文語体、散逸）に基づいて作られた。一方同じ祖本に基づいてローマ字口語体本が作られ、さらにギリシヤ語ラテン語対訳系のラテン語本文の別本が参考原典として加えられて『イソポのハブラス　上巻』が出来、この参考原典に基づいて『イソポのハブラス　下巻』が作られたというのである。

『伊曾保物語』は、刊行当初から、笑話を集めた『戯言養気集』（元和〈1615〜1623〉年間頃）、狂言の芸談に注釈が加えられた『わらんべ草』（万治３〈1660〉年）に引用され、また司馬江漢の随筆集『春波楼筆記』（文化８〈1811〉年）や教訓書である『訓蒙画解集』（文化11〈1814〉年）『無言道人筆記』（文化11〈1814〉年）等にも数話紹介され、さらに天保15〈1844〉年刊の教訓書『絵入教訓近道』には16話が載せられている。そして、それらの書物に引用された『伊曾保物語』（『イソポのハブラス』も含めて）の共通の寓話を比較してみると、寓話及び寓意内容が改変されているものも見られる。このことは、『伊曾保物語』が江戸時代によく読まれ、芸の道の教えや子弟の教育のための教訓書として受容されたことを示しているように思われる。『伊曾保物語』がキリスト教の宣教師によって伝えられた書物であるにもかかわらず、鎖国後も出版され読み続けられたのは、物語の寓意が、その時代にふさわしい教訓として受け入れられたからではないだろうか。本稿は『伊曾保物語』の本文と書物に引用された本文及び寓意に着目することで、日本の近世における『伊曾保物語』の受容のあり方を考察しようとするものである。

一　『イソップ寓話集』翻訳の目的について

二種ある『イソップ寓話集』の翻訳本の片方、ローマ字口語体の『イソポのハブラス』には次に示すような序がある。

ラチンを和して、日本の口と為すものなり。

（図）

ゼズスのコンパニヤのコレジヨ天草において、スペリヨレスの御免許として、これを板に刻むものなり。

御出世より一五九三。

読誦の人へ対して書す。

惣じて人は実もなき戯れ言には耳を傾け、真実の教化をば聞くに退屈するによって、耳近きことを集め、この物語を板に刻むこと、喩へば樹木を愛するに異ならず。その故は、樹には益なき枝葉多しといへども、その中に良き実あるをもつて、枝葉を無用と思はぬが

如くなり。故に、スペリヨレスの仰せをもつて、この物語をラチンより日本の言葉に和げ、いろ〳〵の穿鑿の後、板に開かるゝなり。これ真に日本の言葉稽古の為に便りとなるのみならず、善き道を人に教へ語る便りともなるべきものなり。

これによると、『イソポのハブラス』は一五九三年天草のキリシタンのコレジヨ（学林）で印刷されたことが分かる。そして、「読誦の人へ対して書す。」の後半部からは、この書が外国人宣教師のための日本語稽古のテキストであったことが分かる。しかし、それだけでなく、この書は「善き道を人に教へ語る」ためのテキストでもあった。ここで言う「善き道」がどういう意味概念であるかはさておき、まず前半に書かれていることについて、考えてみる。人は総じて「実もなき戯れ言」つまり、益にもならない作り話はよく聞き、「真実の教化」つまり、真実の正しい道を説いた話は聞くのに退屈するので、「耳近き」つまり、わかりやすい話を集めて、この物語を本にしたのだ。そのことは、例えば、樹木を愛することと、同じである。そのわけは、樹木には益にならない枝葉が多いといっても、その中によい実があるから枝葉を無用とは思わないからである。それ故に、この物語をラテン語より日本語に翻訳したのだ。ということである。つまり、この『イソポのハブラス』の話は、一見、益にもならないが、中によい教えを含んだわかりやすい作り話、ということになるだろう。キリスト教の書物ではない『イソップ寓話集』をなぜキリスト教の宣教師が日本語に翻訳したのかという点についての答えがここにあるように思われる。すなわち、『イソップ寓話集』はキリスト教の教理を説いた「真実の教化」の書物ではないが、そればかりでは聞く人も退屈するので、益にはならないが、その中によい教えを含んだわかりやすい作り話として、翻訳したのである。したがって、「善き道」とは、キリスト教に限定したものではなく、『イソップ寓話集』が本来持つ教訓的な教えを指していると考えてよいのではないだろうか。『イソポのハブラス』が教外の書と言われる所以である。

一方、江戸時代の初めに幾度も出版されて広まった国字文語体の『伊曾保物語』には、前書きも後書きもないため、この書がどういう動機、目的で翻訳されたのか分からない。だが、『伊曾保物語』を見ると、この書を翻訳した人物、あるいは、この書を編集した人物の意図が伝わってくるように思われる。それについて、次に『イソポのハブラス』と比較しながら二つの点について述べることにする。

１　『伊曾保物語』は全体を見通して構成されている。

『イソポのハブラス』では「イソポが生涯の物語略。」「エジットよりの不審の条々。」「イソポ養子に教訓の条々。」「ネテナボ帝王、イソポに御不審の条々。」「イソポが作り物語の抜き書。」「イソポが作り物語の下巻。」と見出しが付けられているが前の四部はイソポの伝記、後の二部はイソポの作った物語と二大別される。しかし、伝記部は、「イソポが生涯の物語略。」の後に、そこに入れなかった話を付け足した形である。また、物語の部では「イソポが作り物語の抜き書。」は上巻とはなっておらず、後のものにだけ下巻と付けられている。物語の部は、

初めは上下に分けるつもりはなかったが、その後に物語を付け足すことになったので、付け加えた物語を下巻としているように見える。つまり、『イソポのハブラス』は、初めから全体を見通した構成はされていないといえるだろう。

一方、『伊曾保物語』は上中下の三部構成で、上巻二十話、中巻四十話、下巻三十四話からなり、それぞれの話には、番号と話の題が付けられていて、初めから整然と構成されている観がある。

2　『伊曾保物語』の寓話部には、寓話に対する翻訳者あるいは編集者の意図が、初めと終わりに書かれている。

『伊曾保物語』は、部立ては『イソポのハブラス』のように伝記部と物語部に大別した構成にはなっていない。上巻の第一「本国の事」からイソポの伝記が始まり、中巻の第十「イソポ、物の譬へを引きける条々」から物語部が始まる。「物の譬へを引きける」と寓話であることが明示され、第十条の題であるのに「イソポ、物の譬へを引きける条々」と以下の寓話全てを統括した題名になっている。第十条の話は、次の通りである[7]。

> つら〳〵人間の有様を案ずるに、色に愛で、香に染めける事を本（もと）として、能道（よき道）を知る事なし。されば、この巻物を一本の樹（うえき）には、必ず花実あり。花は色香をあらはす物なり。実はその誠をあらはせり。されば、鶏になぞらへて、その事を知るべし。鶏は（古活字本に無し）塵芥（ちりあくた）に埋づもれて、餌食を求むる所に、いとめでたき玉をかき出だせり。鶏、かつてこれを用ひず。踏みのけて、己れが餌食を求むる（古活字本に無し）。
>
> その如く、あやめも知らぬ人（に）は、たゞ、鶏に異ならず。玉の如くなるよき道をば、少しも用ひず、芥なる色に染みて、一生を暮らすものなり、とぞ見え（侍り）ける。

第一文目は、よくよく人間の有様を考えてみると、美しい色や良い香りなどに心を奪われることを第一としていては、精神的なよき道を知ることはないということである。二文めの「この巻物を」のあとには、「この巻物をもととしてよき道を学び知るべし」といった趣旨の文が続くはずだったと考えて、この部分を解釈したいと思う[8]。そして、一本の樹には、必ず花と実があるが、花は、人の心を奪うような美しい色や、良い香りを持つもので、実は誠のよき道を示すものである。そこで、鶏になぞらえてそのことを理解することができるだろう、というのである。ここに出てくる鶏と玉の話は、小堀桂一郎氏によると、『伊曾保物語』翻訳の原本の一つと考えられているシュタインヘーヴェル本所収の寓話である[9]。鶏は、すぐれた玉があっても、全くこれを使うことをせず、踏みのけて、自分の餌食を求めるばかりだ。このように、分別の付かない人は、この鶏と同じで、玉のようなよき道を知っても、少しもそれに進もうとせず、鶏が餌食をあさる塵芥のような色香に心を奪われたままで一生を暮らすのだ、ということだ。つまり、中巻第十条は、この書物『伊曾保物語』を読んで、寓話に出てくる鶏のようにはならないように、よき道を学び、よき道に進むよう心がけなさい、と読者に呼びかける序言のような内容になっている。

そして、下巻の第三十四条（最終話）は、善人になりたいと願い、祈禱を頼む盗人に、僧が、先ず自身の悪念の石を離れなければどのような祈りをしても善人にはなれないと語り、盗人はその場で元結いを切って、僧の弟子になり、善人になった、という話のあとに、「この経を見ん人は、たしかにこれを思へ。ゆるがせにする事なかれ。」と書かれて物語を終えている。「この経」つまり『伊曾保物語』を読む人は自分が抱きかかえている悪念の石から離れ、善き人になるよう、よき道に進むよう精進しなさい。これをゆるがせにすることがないようにしなさい、と説いているのである。それまでの寓話に必ず付けられている、寓意の初めに置かれた「その如く」という言葉は使われておらず、この一文は、寓意というよりも、『伊曾保物語』全体に対して付けられた筆者の後書きのようにも受け取れる。『伊曾保物語』は、一見すると前書きも後書きもない、作られた目的の分からない書物なのだが、こうして、この書を読み進め、寓話部の初めと終わりを見てみると、内容は一貫した、人々をよき道に教え導く教訓書なのである。

『イソポのハブラス』はローマ字口語体で書かれ、外国人宣教師が日本語を学ぶための書物であることが第一義であったから、前書きである「読誦の人へ対して書す。」にそう記されていたのである。しかし、『伊曾保物語』は国字文語体で、日本人に向けて作られた書物である。その冒頭が『イソポのハブラス』の序のように書かれていたら、キリシタンが日本に持ち込んだ書物でもあり、おそらく『伊曾保物語』は禁制にふれて、このように度々出版されることもなく、多くの人に読まれることもなかっただろう。『伊曾保物語』は初めから全体を見通して構成され、この書を読みよき道を学びよき道に進むように心がけよ、という編者の意図がこめられた書物であったと思えるのである。つまり、『伊曾保物語』はイソポの生涯とイソポが作った物語を集めたもので、一見すると、前書きも後書きもなく、どういうねらいで書かれたか分からない書物であるが、読み進むうちに、人々をよき道に教え導く教訓書だと分かるように仕組まれていたのであろう。だからこそ、その後、多くの人に読まれ、またいくつもの教訓書に引用されることになっていったのであろう。

それでは、『伊曾保物語』は、その後の江戸時代にどのように受容されていったのだろうか。それを次の章で見ていくことにする。

二　江戸時代における『伊曾保物語』の受容

『イソップ寓話』が日本に伝えられた当時の、キリスト教に関連した歴史的事項を年表にすると次の表のようになる。

一五四九	ザビエル鹿児島に来てキリスト教を伝える。
一五六九	ルイス＝フロイス、信長に謁見、京都居住及び伝道を許される。
一五八二〜九〇	大友、大村、有馬三氏、ローマ教皇に少年使節派遣。

一五八七　　秀吉、キリスト教の宣教師を追放。
一五九七　　長崎に二十六聖人殉教。
一六一二　　幕府直轄領のキリスト教信教禁止。
一六一四　　高山右近、内藤如安等のキリシタン信者を国外追放。
一六一六　　欧船の来航を平戸・長崎に制限。
一六二九　　踏み絵の初め。
一六三〇　　キリスト教関係の書物輸入の禁止。
一六三七〜三八　島原の乱
一六三九　　ポルトガル人の来航を禁ず。　宗門改め。
一六四一　　オランダ人を長崎の出島に移す。
（『日本史年表・地図』〈吉川弘文館　1995年〉より）

これによると、『イソポのハブラス』が天草で出版されたときには、キリスト教の宣教師は追放されていたし、刊記の有る国字古活字本の『伊曾保物語』が出版された寛永16（1639）年までにはキリスト教は禁止され、キリスト教関係の書物の輸入も禁止され、その二年後には完全に鎖国の状態となっている。ところが、古活字本の『伊曾保物語』はその間に九種も出版され、鎖国後も万治２（1659）年に挿絵入り製版本が出版され、一般に広く普及し、読まれている。小林千草氏が指摘しているように、『伊曾保物語』はキリシタンとは全く無関係と思われていたのかもしれない[10]。先にも述べたように『伊曾保物語』を見る限りにおいては、この書とキリシタンとの繋がりは分からない。

さて、『伊曾保物語』は、刊行当初から、笑話を集めた『戯言養気集』（元和〈1615〜1623〉年間頃）、狂言の芸談に注釈が加えられた『わらんべ草』（万治３〈1660〉年）等に引用されている。樗樸道人の『鄙都言草』後編巻下（享和２年〈1802〉年）には「伊曾甫といへる草紙」という名前で『伊曾保物語』が紹介され、一話載せられている。また司馬江漢の随筆集『春波楼筆記』（文化８〈1811〉年）や教訓書である『訓蒙画解集』（文化11〈1814〉年）『無言道人筆記』（文化11〈1814〉年）には数話紹介されている。『春波楼筆記』には『伊曾保物語』の名前と、それが西洋の訳書で譬喩であることも紹介されている[11]。さらに天保15〈1844〉年刊の教訓書『絵入教訓近道』には十六話が載せられている。これらのことは、『伊曾保物語』が江戸時代によく読まれ、芸の道における弟子への教えや子供の教育のための書物として受容されたことを示しているように思われる。また、これらの、江戸時代に引用された共通の『伊曾保物語』寓話を比較してみると、寓話や寓意内容が改変されているものがあることにも気が付く。

『伊曾保物語』がキリスト教の宣教師によって伝えられた書物であるにもかかわらず、鎖国後も出版され、読み続けられたのは、それがキリシタンの書物であることが分からなかったこともあるが、それだけではなく、物語の寓意が、江戸時代にふさわしい教訓として受け容れら

れたからではないだろうか。この点について、次に『伊曾保物語』から「鶴と狼との事」と「蟾蜍（がざみ）の事」を取り上げて、具体的に考察していきたいと思う。

１「鶴と狼との事」について

この話は『伊曾保物語』『イソポのハブラス』『絵入教訓近道』に共通して載っている。また、司馬江漢の『春波楼筆記』『訓蒙画解集』『無言道人筆記』にも載っているが大分脚色されている。

『伊曾保物語』の本文は次のとおりである。

> ある時、狼、咽喉に大きなる骨を立てて、（すでに）難儀に及びける折節、鶴、この由を見て、「御辺は、何（事）を悲しみ給ふぞ」といふ。狼、泣く〳〵申しけるは、「我が咽喉に、大きなる骨を立て侍り。これをば、御辺ならでは救ひ給ふ（べき）人なし。ひたすら頼み奉る」といひければ、鶴、件の口ばしを伸べ、狼の口をあけさせ、骨を咥（くわ）へて、「えいや」と引き出だす。
>
> その時、鶴、狼に申しけるは、「今より後、この報恩によつて、親しく申し語るべし」といひければ、狼、怒つていふ様（は）、「何条、汝が何程の恩を見せけるぞや。汝が首、（しや）ふつと食いきらんと（ぬも）、今某（それがし）が心にありしを、助け置くこそ、汝がためには報恩なり」といひければ、鶴、力に及ばず立ち去りぬ。
>
> その如く、悪人に対して、能き事を教ゆといへども、かへつてその罪をなせり。しかりといへども、（悪）人に対して、能き事を教へん時は、天道に対し奉りて、御奉公と思ふべし。

ある時、喉に骨を立てて難儀していた狼を、鶴が見て「御辺は何を悲しみ給ふぞ」と尋ねる。鶴から見れば狼は「御辺」「給ふ」と敬語を使うべき相手なのだ。一方、鶴に命を救ってもらおうと頼む狼は、鶴を「御辺」とよび、「泣く泣く申す」のである。鶴に対して狼が敬語を使っている。いかに狼が困り果てていたかが分かる。この部分は、『絵入教訓近道』では、狼は「涙を落として」とさらに狼の困窮ぶりが描かれる。また『イソポのハブラス』では、狼の方から「この難をお助けあらば、水と魚の如く親しみまらせう。その上、生々世々その恩を忘却仕ることは有るまじい」と骨を抜いてもらうことのお礼（交換条件）まで提示して、助けて欲しいと頼むのである。そこで、鶴は憐れに思って（『イソポのハブラス』には「哀れに思ひ」とあり、『絵入教訓近道』では「不愍に思ひて」となっている。『伊曾保物語』にはこの表現はない。）、狼の口を開け長い嘴で骨を抜いてやるのである。

ところで、この箇所以下の話は、司馬江漢の三書では三書ともこれと違っている。『春波楼筆記』の本文を次に示す。

> 猛獣狼、喉に骨をたて喰する事能はず、既に饑に及ばんとす。時に鶴来れり。狼鶴に向つて曰く、汝に吾たのむ事あり、長き嘴を以て咽の骨を抜くべしや否や。鶴恐れて曰く、

命に従ふべし。竟に骨をぬく。狼の曰く、予此の骨の為に数日饑ゑたり、故に先汝を喰はんと。恩を讐で報ずと云ふ事なり。

三書とも、鶴は、狼を恐れて骨を抜いてやるのである。『訓蒙画解集』『無言道人筆記』では更に狼の恐ろしさを強調するために、「豺狼、人を喰いて、咽喉に骨あり。飲食を絶つ。」と書かれている。狼は人を食べて、その骨が喉に刺さって困っていたのである。人がこの狼に殺されていたのだから、この鶴は恐ろしくて断ることも出来ず、言われるままに狼の喉から骨を取ってやる。すると、この恐ろしい狼は、鶴に恩を感じるどころか、この鶴を食べてしまうのである。この狼は喉に刺さった骨のために食べることが出来ず餓えていた。『訓蒙画解集』『無言道人筆記』では「七日食わず」とさらに餓えていることをだめ押しして、狼が鶴を食べることが当然であるように導いている。そして、寓意としては、「恩を讐で報ずと云ふ事なり。」と語るのである。しかし『伊曾保物語』では司馬江漢の三書とは違い、狼が鶴を食べるということはない。狼の骨を抜いてやった鶴が、「今より後、この報恩によって、親しく申し語るべし」と、狼に情けをかけ、親しくしようと声をかけるのである。しかし、喉の骨がとれて、自由になった狼はもう元の獰猛な動物である。また、鶴のような弱い者にそのように言われたことに怒る。鶴を呼ぶ言葉も「御返」から「汝」に変わっている。命を助けてもらった恩も恩とは思わず、逆に、鶴に「汝が首、ふつと食いきらんと、今某が心にありしを、助け置くこそ、汝がためには報恩なり」と自分勝手な報恩を振りかざすのである。いや、狼からすれば、ここで鶴を食わずにおくことは、骨をとってくれた恩に報いたことになるのだろう。そこで、『伊曾保物語』では鶴は、「力に及ばず立ち去りぬ。」ということになる。この、鶴の「力に及ばず」とは鶴が狼には太刀打ちできなかったことを指すと考えてもよいだろうが、別の見方も出来るように思う。つまり、鶴は狼に情けをかけて、狼の心を懐柔し、以後親しく交わろうとしたが、そのことが「力に及ばず」、狼の心が動くことはなく、それを知って狼と親しくすることは諦めて立ち去ったとも考えられる。しかし、『絵入教訓近道』ではこの箇所は「鶴は呆れて飛び去りけるとぞ。」となっている。狼の自分本位の言い分に呆れてそれ以上言っても無駄と思って立ち去ったのである。そのようにみると、狼の心を懐柔し、親しく交わろうとしたこの箇所には、『伊曾保物語』の翻訳者の、キリスト教布教を目的とする姿勢の一端がうかがわれるようにも思われる。一方『イソポのハブラス』では「鶴は無益の辛労をして、立ち去っておじゃる。」となっている。狼を憐れに思い骨を抜いてやったが、そのことが狼と鶴の関係を、強い者とそれを恐れる弱い者という上下関係から、「水と魚のごとく親しむ」睦まじい関係に変えることにはならなかったということを「無益の辛労」と言っているのであろう。ここは『イソポのハブラス』がキリスト教を布教する宣教師のために書かれた書であることが分かる部分である。下心以下に「恩をも知らぬ悪人に恩を施さうずる時は、ひとへに天道へ対してめされい。」と書かれているのも、実際の布教の中で、悪人に対して恩を施すような事があった時には、「天道（神様）に対して」の行為なのだと考えるようにしていたということなのではないだろうか。

一方、古活字本から万治絵入本の『伊曾保物語』になるとキリスト教の宣教師の手を離れ、日本人のための読み物となっていることがこの部分からわかる。寓意には「その如く、悪人に対して、能き事を教ゆといへども、かへつてその罪をなせり。しかりといへども、（悪）人に対して、能き事を教へん時は、天道に対し奉りて、御奉公と思ふべし。」と書かれている。悪人に対して良いことを教えても（良いことをしてあげても）、悪人にとっては罪なことになる[12]。この話から見ると、悪人の命を助けてやっても、それを機に善人になるのではなく、結局永らえた命でまた悪事をし続けるのだから、かえって罪となる。という解釈も出来そうである。このように、まずひとつの教訓が置かれている。そして、続けて、だからといって、もう人に良いことをしないというのではなくて、人に（古活字本では悪人に限定されているが、万治絵入本では悪人だけに限らず人全てについていっていることに注意したい。）良いことを教え（し）てやる時は、その人にするのではなく天道（神様）に対するご奉仕だと思いなさい。と二つめの教訓が置かれるのである。ここで悪人に対して良いことをするというと、宗教的なものを感じさせるが、人に対して良いことをするというのは、ごく普通の行為と言えるだろう。天道という言葉にキリスト教の名残を感じるけれども、もう一般の日本人のための読み物となっているとみてよいだろう。

「鶴と狼との事」における「天道」という言葉について、遠藤氏は「本例の「天道」は「悪人の難儀を救おうとする時は、Deus（天道）に奉仕するのだという心でせよ」という「慈悲（charidade）」の行為の目的を説くために登場したものと考えてよいであろう。つまり、本例は原典の原話に対する訳者（古活字本祖本の訳者）のキリシタン的解釈から生じたものと考えられるのである。」と述べている[13]。また、『イソポのハブラス』に対して『伊曾保物語』に「天道」の使用頻度が高いことについて、「古活字本の下巻には宗教色の濃厚な話が多いということなどと考え合わせると、古活字本祖本の翻訳目的とも結びつく一つの特徴であると見ることができるであろう。古活字本祖本が日本人の教化の手段ということを主目的として翻訳されたのは確かであろう。」とも述べている[14]。確かに古活字本祖本の翻訳者にはそのねらいがあり、その目的で「天道」という言葉を使ったのかも知れない。しかし、「天道」という語は『角川古語大辞典』によると「天の意思。それは森羅万象を支配するので、天地間におのずから行われる道理の意ともなり、また、その道理にかなう生き方を正しいとする思想にも結びつく。また、神格化された天、天帝をもいう。本来は儒教の概念であるが、仏典やキリシタン文献でも用いられる。」とあり、『日本国語大辞典』では「①天地自然の道理。天の道。天理。②天地を主宰する神。天帝。上帝。また、その神の意思。天地間の万般を決定し、さからうことのできない絶対的な意思。③（一般に「てんとう」）太陽。日輪。てんとうさま。④天体の運行する道。天。空。天空。等」と非常に多様な意味を持つ言葉であり、それ以前にも儒教、仏教、また一般に太陽の意味にも使われており、『伊曾保物語』の中で使われている『天道』がキリスト教の神を表していたということが一般の日本人には分からなかったのではないだろう

か。

さらに『絵入教訓近道』は『伊曾保物語』をもとにしておよそ二百年後に書かれているのだから、キリスト教的な要素はなくて当然である。寓意部分は万治絵入本『伊曾保物語』とほぼ同じであるが、「良きことを教ゆるは、天道様への奉仕と思ふべし。」と「天道」が「天道様」となっている。天道に様がつきお日様のようにもっと身近な神様の意識で解釈されていると思うのである。

2　「蟾蜍（がざみ）の事」について

この話は『伊曾保物語』にはあるが、『イソポのハブラス』にはない話である。『伊曾保物語』の本文を以下に示す。

> ある蟾蜍（がざみ）、数多子を持ちけるなり。その子、己れが癖に、横走りする処を、母、これを見て、諫めて云く、「汝等、何とて（何によりてか）、横様には歩みけるぞ」と申しければ、子供、謹んで承る。（り、）「一人（いちにん）の癖にてもなし。我等兄弟、皆かく（形）の如し。然らば、母上、歩（あり）き給へ。それを学び奉らん」といひければ、「さらば」とて、先に歩（あり）きけるを見れば、我が横走りに少しも違はず。子供、笑つ（ひ）て申しけるは、「我ら、横に歩き候が（横ありき候か）、母上の行（あり）き給ふは（あるかせ給ふは）、縦歩きか、傍（そば）歩きか」と笑ひければ、詞（ことば）なふして（なふてぞ）居たりける。
>
> その如く、我が身の癖をば顧みず、人の過ちをば、いふものなり。もし、さやうに人の笑はん時は、退いて、人の是非を見るべきにや。

母蟹が自分の横這いに気付かず、子蟹達に横這いを注意して、かえって子どもたちから自分の横這いを指摘されて恥ずかしい思いをしたという話である。この話を受けて寓意では、人は自分の癖を顧みずに人の過ちを言う。人が自分を笑う時は、その人の是非を見るべきだ。といっている。つまり、もし他人が笑う時は、一歩下がってその人が正しいかどうか見るべきだ（その人の方が間違っている）というのである。これは教えられる者の立場に立った寓意である。この話は、『わらんべ草』では三十三段に、ほぼそのままの形で引用されている。三十三段には「物を習はんとあらば師をよく吟味すべし。師は針の如く弟子は糸の如しと言へば、悪き師に習はん言勿体なし。必師の悪しき癖を能似する物也。よき事はならぬとみえたり。弟子のことざまを見て我誤りを知る。」と書かれていて、この教えの例として、引用されている。弟子は師の悪い癖をよく真似する（学ぶ）。悪い師に習うのは勿体ない。物を習う時は、師をよく吟味すべきである。というのである。ここでは、母蟹は、悪い師の例として、引用されているのである。ここまでの部分についていえばやはり教えられる者の立場に立った教訓であって、『伊曾保物語』の寓意と意図するところは同じである。しかし、さらに、弟子を見て、師は自分の誤りを知るのだと言っている。子蟹に指摘されて、自分の横歩きを知った母蟹がそれである。ここで初めて、教える者の立場の教訓となる。『わらんべ草』では『伊曾保物語』の

寓意をそのまま受け継ぎながら、寓話のなかにさらに新しい教訓を見出しているのである。また、樗樸道人の『鄙都言草』後編巻下には、次の文章が載っている。

伊曾甫といへる草紙に、がざみ、あまた子を持ちけるに、その子、己が癖に、横走りするを見て、その母、これを憐れみて云く、「汝等、何とて横ざまに歩みけるぞ」と申しければ、子供ら謹みて承り、「我等の癖のみにもあらず。我等兄弟皆々かくの如し。然らば母上より、先づ歩ませ給へ。それを学びてん」といふに、「さらば」とて、母は先に立ちて歩きけるを見て、その子供等、皆々笑ひけるとなり。子に教ゆるは親の道といひながら、教ゆる道を知らずして、強て教えんとする時は、又かの蟹の母の如くなるべし。

人はみな横に目がつき横に行く芦間の蟹のあわれ世の中

ガザミの話は『伊曾保物語』と同じであるが、寓意が、「子に教ゆるは親の道といひながら、教ゆる道を知らずして、強て教えんとする時は、又かの蟹の母の如くなるべし。」と変わっている。教える道を知らない者が強いて教えようとしてはいけない。もしくは、教えようとする者は、まず自分が教える道を究めなければならない。という全てが教える立場の者の教訓となっている。

この話は教訓として利用しやすかったようで、柴田享（陽方）の『続々鳩翁道話』（天保９〈1838〉年）にも出てくる。

ある人の歌に、「岩根ふみからたちわけてゆく人はやすき大路をすぎがてにする」と、朝から晩まで、岨道を横ばひする、不行儀な蟹仲間が多い、さりとてはこまつたものぢや。其くせ人の横ばひするのは、よう目にかゝつて、見事人の小ごとはいへど、おのれが横にあるくのは、トントめにかゝりませぬ。又ある人の発句に「蟹を見て気のつく岨の清水かな」。おもしろい句ぢゃござりませぬ歟。此の句を、我得かたに取つて見れば、人の横ばひが目にかゝつたら、チヤツト、わが身にたちかへつて、我もよこ這ひはしてゐぬ歟と、気をつけてごらうじませ。此気がつくと、慎みの心がおこる、慎みの心が起れば、おのづから生まれつきの、性をやしなふ頼りになります。（後略）

『続々鳩翁道話』では、前半部は、『伊曾保物語』の話をそのまま引いている。つまり、人の横這いは気付くが、自分の横這いには気付かない、ということが書かれている。後半は、それを自分のこととして捉え直して、人の横這い（つまり欠点）に気付いたら、わが身に照らしてみて、自分も横這いしていないか気をつけよう、と書かれている。「人のふり見て我がふり直せ」ということである。さらに、そうすると慎みの心が起こると書かれ、これも教える立場の者の教訓が説かれているのである。

司馬江漢の『訓蒙画解集』『無言道人筆記』では『伊曾保物語』を引き写したのではなく曾て読んだ記憶をたどりながら書いたためか、脚色されている。つぎに『訓蒙画解集』の本文を示す。

蛙、蟹に対して云う、「爾往くを為すや、返るを為すや」と。蟹答えて曰く、「公、足有

りと雖も歩むを見ず。啻(た)だ蟻蹤するのみ。他の非を謂わん者は先ず己を正せ 」と。蛙答えずして去る。蟹の横行は往くに非ず返るに非ず。横は直の曲なり。且つ世に横に歩む者を見ざれば、則ち行くに於いて実に慙ずべきの甚だしきかな。蟹是に於いて我が子を呼びて曰く、「汝等必ず横行の良を為す莫かれ」と。

人、酒を好む。大酒は身を亡ぼすと云いつつ呑むなり。己の子にはのむなと云う。

まず『伊曾保物語』には出てこない蛙が登場する。歩くことをせず、跳ぶだけの蛙が、横這いをする蟹に「往くを為すや、返るを為すや」と横這いの非を指摘する。これに対して、蟹は、人の過ちを言う者は自分の過ちに気付いていない（「蟾蜍(がざみ)の事」の寓意）、ということを知っていて、蛙に「他の非を謂わん者は先ず己を正せ」と、堂々と言い返している。『伊曾保物語』の話そのままであれば、ここで終わってもよいのだが、更に、蟹が自分の歩き方を恥じるということが付加される。そして、子蟹に横行するなと注意するのである。『伊曾保物語』では、母蟹は自分の横這いに気付かないで子蟹に横這いするなと言うのだが、ここでは、自分の横這いを知った上で、それを恥ずかしく思って子供にするなと言う。『訓蒙画解集』の話の後につけ加えられている酒を飲む人と同様で、「親は自分に出来ないことを子供にさせようとする」といった「人の性」をこの話で描いている。これは、教訓とは違った世の中の一面の真理といってもよいかもしれない。このように「蟾蜍(がざみ)の事」では受容話の中に『伊曾保物語』にはなかった寓意の広がりが見られるのである。これは「蟾蜍(がざみ)の事」の寓話が、教える者と教えられる者の両方が登場する話で、どちらの立場からも教訓を読み取る事が出来るといった含意性の高い話だからなのだろう。

おわりに

キリスト教宣教師によって伝えられた『イソップ寓話集』は、日本語に翻訳され、外国人宣教師のための言葉稽古のテキストとして、また「よき道」を人に教える書物として、ローマ字口語体の『イソポのハブラス』が作られた。一方、どういう経緯かは不明であるが、一般の日本人のために国字文語体で作られた『伊曾保物語』は、明らかに「よき道を教える教訓書」としてのねらいをもって構成されている。そして、この『伊曾保物語』は、鎖国後の日本において、高い頻度で出版され、一般に普及し、読まれた。本稿で具体的に示すことが出来たのは「鶴と狼との事」「蟾蜍(がざみ)の事」の二話だけであったが、後の時代に書かれた書物の中に『伊曾保物語』の寓話は相当数引用されている。

引用している書物は、笑話集、芸道書、文人の随筆、教訓書とと多岐にわたっているが、人を導くための書物での引用が多い。そして、引用された『伊曾保物語』の寓話には、必ず寓意部分がついていた。さらに、同じ寓話であっても、寓意部分にはそれぞれ、引用の目的にあった加筆改変が見られた。それらを考え合わせると、『伊曾保物語』は、『イソップ寓話』がその

中に本来持つ処世のための知恵や教訓が、江戸時代の、諸芸の師（狂言師大蔵虎清・虎明のような）、学者、教育者（司馬江漢や鳩翁のような）に童蒙を教導する材として受け入れられたと言えるだろう。また、『伊曾保物語』の持つ、寓話と寓意との関係の柔軟性、言い換えると、一つの寓話から複数の違った寓意を読み取ることが出来るという柔軟性が、江戸時代の『伊曾保物語』の受容をさらに推し進めたと言っても良いと思う。そしてそのことが、鎖国後の日本に於いても『伊曾保物語』が広く読まれた理由といえるだろう。誰かは分からないが、『伊曾保物語』が持つそれらの特徴を見抜き、『伊曾保物語』という名前の一見仮名草子風の教訓書にまとめた人物のねらい通りになったと言えるのではないだろうか。

〔注〕

（１）　本論文で使用した本文は、国字文語体のものが『万治絵入本伊曾保物語』（武藤禎夫校注　岩波文庫　2000年）、ローマ字口語体のキリシタン版のものが『吉利支丹文学集２』（新村出、柊源一校註　平凡社東洋文庫　1993年）所収の『イソポのハブラス』であるが、『天草本伊曽保物語』（新村出翻字　岩波文庫　1939年）、『キリシタン版エソポのハブラス私注』（大塚光信　臨川書店　1983年）も参考にした。キリシタン版の呼び方が統一していない上に両者の名前がよく似ていて紛らわしいため、国字本を『伊曾保物語』、キリシタン版を『イソポのハブラス』で呼び分けることにした。

（２）『伊曾保物語』におけるイソポの伝記は上巻の二十話と中巻の第九条までの二十九話であるが、第一条の「本国の事」には、『イソポのハブラス』「イソポが生涯の物語略」の第一話と第四話の内容が含まれるため、『伊曾保物語』の伝記部の話数を三十話と認定した。その中で、『イソポのハブラス』の伝記部と共通する話は二十三話である。

（３）　新村出「『伊曽保物語』の旧代和本」（『天草本伊曽保物語』―新増附録　1928年、『新村撰集（一）』収録、『新村出全集　第七巻』筑摩書房　1973年）には、ロドリゲスの『日本文典』に、『イソポのハブラス』のみに所収の「炭焼と洗濯人の事」と「病者と医師の事」に出てくる文例が文語体であって口語体でないことから、「文禄本（『イソポのハブラス』筆者注）は、直接に拉丁の原本から口訳したのではなくて、その以前に或は既に存したかも知れぬ所の文語訳本の一異本に基いたのであるかも知れない。」と指摘されている。

（４）　小堀桂一郎『イソップ寓話』（講談社学術文庫　2001年〈1978年中公新書『イソップ寓話』の再刊〉）には、邦訳本『イソップ寓話』の原本についての論考があり、次のように指摘されている。

第一に、「原・伊曾保物語」の直接の底本はシュタインヘーヴェル本である。（略）次に、『伊曾保』は祖本たる「原・伊曾保物語」に一応忠実であり、そこからはみ出すような要素はないが、「イソップ伝」の部分においては祖本の範囲内で自由な編輯・改作の手を加えてある。（略）第三に、『ハブラス』の下巻は「原・伊曾保物語」からはみ出す部分があまりに多く、これを底本と呼ぶことはできない。

（5）　大塚光信『キリシタン版エソポのハブラス私注』（臨川書店　1983年）の解説には、岩波日本古典文学大系『仮名草子集』所収『伊曾保物語』の解説で森田武氏が示した、ロドリゲス『日本大文典』に引用された『イソポのハブラス』文例の分析をふまえて、「これは、天草本が文語訳本にもとづく可能性をかたるとともに、その文語訳本は、天草本と古活字本の二つを大体においてそっくりとりこんだ程度のものだったのではないかということを思わせる。」と指摘されている。

（6）　遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究　総説編』（風間書房　1987年）はこれまでの論考を受けさらに原典について考察している。そこで、本論文にはこの説を引用している。

（7）　本文は『万治絵入伊曾保物語』（岩波文庫）による。（　）は古活字版『伊曾保物語（旧版岩波日本古典文学大系『仮名草子集』）による校訂。以下の引用も同じ。

（8）　『万治絵入本伊曾保物語』の脚注では『イソポのハブラス』の「読誦の人へ対して書す。」から「板にきざむこと、たとへば樹木を愛するに異ならず。そのゆゑは、植木には益なき枝葉多しといへども、そのなかに良き実あるをもつて、枝葉を無用とおもはぬがごとくなり。」を補って解釈しようとしているが、『イソポのハブラス』では益のない枝葉とよき実とを対比させて説いているのに対して、『伊曾保物語』では人の心を奪う美しい色香を持つ花と誠をあらわす実とを対比させて説いているので、ここにそれを補うのは無理があると思う。小堀氏が前掲書で書いているように、「この巻物をもととしてよき道を学び知るべし」を補うのが適当だろう。

（9）　小堀桂一郎　前掲書

(10)　小林千草氏は「仮名草子『伊曾保物語』の寓話と中世史実――織田信長と「御袋様」との母子関係」（『成城国文学』18、2002年）の注で、刊記のある古活字版『伊曾保物語』が出版された寛永十六（1639）年の時代相を次のように示し、「このような年に、古活字版『伊曾保物語』を出すことは、この書が、「キリシタンには全く無関係である」という認識が出来ていないと不可能なことである。」と述べている。

> 寛永十六（1639）という時代相を示すと、前年二月二十八年に原城が陥落し、前々年（1637）十月二十五日に火ぶたを切った〝島原の乱〟がやっと幕府の威信をかけて制圧されている。〝島原の乱〟のようなキリシタン信者の反乱を二度と起こさせないために、江戸幕府は、キリシタンをさらに厳しく取り締まり、「宗門改帳」を全国規模で作成するように命じ、また、ポルトガル船の来航とキリスト教の厳禁を対外的にも通告している。

(11)　司馬江漢の『春波楼筆記』（文化８〈1811〉年）には『伊曾保物語』についてつぎのように書かれている。

> 伊曾保物語と云ふ書は西洋の訳書なり、其の原本紀州侯にあり、予直に見たり、皆譬を以て教を設く。爰に一二章を掲ぐ。

この後、『伊曾保物語』の中から「鶴と狼との事」「猿と人との事」「鳥、人に教下をする事」の三話が載せられ、その後、また『伊曾保物語』について次のような説明がのせられている。

> 此の書は二百年以前の書にて、皆かな書なり。汝と云ふ事を御辺とあり。其の後お手前

と呼ぶ、また貴様と云ふ。今は武家に至るまでお前と呼ぶ、御前と称するが如し。譬の諺に云く、お前敬薄、同輩に向つてお前と云ふ事、諂者なる事を云ふ。亦云く、此の書は西洋書にて、シンネベールと云つて譬諭なり。いま和蘭の書を学ぶ者、解しがたき辞にして、二百年以前西洋の学をする者ある事を知るべし。

(12)『万治絵入本伊曾保物語』（前掲）の脚注には「余計なことだと、悪くとられることがある。」としている。

(13) 遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究　続編』（風間書房　1984年）第三章「Caxton集との比較から見た古活字本・天草本の「天道」と「天」」

(14)『伊曾保物語』における「天道」について遠藤潤一氏は次のように指摘している。

キリシタン訳書全般に通ずるように一般化して示すと、観点はつぎのようになる。

〔１〕訳者が原典における何らかの異教的語句等をキリシタンの信仰的見地から「天道（Deus）」に置き換えたもの。つまり、「天道」に対応する何らかの語句が原典に有ると考えられる場合。

〔２〕訳者が原典における内容にキリシタンの信仰的見地による解釈を加えたことによって、訳文に「天道（Deus）」という語が登場することになったもの。つまり、「天道」に対応する何らかの語句が原典には無いと考えられる場合。

（中略）その結果、古活字本の「天道」例16例は〔１〕に属するもの10例、〔２〕に属する物６例ということになる。筆者はこの傾向を古活字本祖本の有していた性質と一応考えるのである。（中略）古活字本の下巻には宗教色の濃厚な話が多いということなどと考え合わせると、古活字本祖本の翻訳目的とも結びつく一つの特徴であると見ることができるであろう。古活字本祖本が日本人の教化の手段ということを主目的として翻訳されたのは確かであろう。それに対して、天草本には日本語教科書という主目的があったためか、「イソップ寓話集」という枠から必要以上に出ることを抑える力が強く働いていたらしい。（中略）古活字本の「天道」例16例の中で天草本でも「天道」となる例がわずか３例しかないということは、そのことと結び付く特徴であると考えてよいであろう。

〔参考文献〕

徳田和夫・矢代静一『お伽草子・伊曾保物語』（新潮古典文学アルバム16　1991年）

（はまだ　ゆきこ　　文学研究科国文学専攻博士後期課程）
（指導：黒田　彰　教授）

2009年９月10日受理